

二〇二二年度

第一回 入学試験問題

国語（五十分）（全十一ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生の主人公「ぼく」はテニス部に所属している。ここでは、一年生が昼休みにグーパーじゃんけんをして、少数だった方がコート整備をすることになっている。ある日、武藤からパーを出すように言われ、末永以外は全員、パーを出した。その結果末永が一人でコート整備をすることになる。「ぼく」はそのことを後悔し悩んだが、どうしたら良いかわからないまま翌日の朝練を迎える。

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は球拾いと声だしにまわる。

力試しにはもってこいだが、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことはなかった。武藤や末永でも三回に一回勝てるかどうかで、久保は一度も勝つことがない。ぼくは勝率五割をキープしていたが、団体戦に出場するレギュラークラスには **X** が立たなかった。ただし、一度だけ中田さんから金星をあげたことがある。ベースラインでの打ちあいに持ちこんで、ねばりにねばって長いラリーをものにした。誰が相手であれ、きのうからの **①** を吹き払うためにも、ぼくはどうしても勝ちたかった。

ところが、やる気とは **a 裏腹** に、ぼくは一ポイントも取れずに負けてしまった。武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブルフォルトを連発して自滅。久保も、ほかの一年生たちも、**Y** も **Z** も出ないまま二年生にうち負かされて、これまでにない早さで勝負がついた。

「どうした一年。だらしがねえぞ」
キャプテンの中田さんに命じられて、ぼくたちはグラウンドを走らされた。いつも先頭をきつているので、みんなの姿を見ずに走るのはなれていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついてきているのか、気になってしかたがなかった。

誰もが、きのう末永をハメたことを後悔しているのだ。足を止めて、一年生全員で話しあいをして、昼休みのコート整備を当番制にかえてもらうようにキャプテンに頼もうと言いたかったが、おもいきれないまま、ぼくはグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」
中田さんの声を合図に全力疾走となり、ぼくは最後まで先頭を守った。

「ボールはかたづけしておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分をすぎたので、ネットのむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、まちがっても今日はやるなよと **b 釘** を刺して

おきたかったが、息が切れて、とても口をきくどころではなかった。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、②ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったにちがいない。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がっていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうのしかえしに、末永がなにかしかけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしでもうしあわせて、たとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がつきつぎ頭にうかび、これはおもっている以上に厄介だと、ぼくは頭を悩ませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けてもらおうしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きつにおもいをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいっているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さん

に頼むとしても、まずはみんなであやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭にはいっていなかったが、③ぼくはようやく自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下に出ると、武藤が顔をうつむかせてこっちに歩いてくる。

「よお」

「おつ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をかべた。そんな姿は見たことがなかったのも、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんにうちあげたのではないかと、ぼくはおもった。たつぷり怒られるだろうが、それでケリがつくならかまわなかった。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。

給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。しかし集まったのは一年生だけだった。④ぼくは落胆すると同時に自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張で青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況じょうきょうで、きのうはハメて悪かったと末永にあやまった
ら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、
よけいなことを言いやがってとうらまれて、末永だって怒いかりのやり場に
こまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふうにグーパーじゃんけんをする
ことだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然ぐうぜん、グーパーがひと
りになる可能性だつてある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひと
りになってしまったら、事態はこじれて収拾しゅうしゅうがつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。⑤どう
か、グーパーが均等に分かれてほしい。

(中略)

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョコキをだしていた。本当
はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョコキにしか
見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーパーが八人。末永はパーで、武藤
と久保はグーパーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があつた。

「⑥太二、わかつたよ。おれもチョコキにするわ」

久保はそう言ってグーパーからチョコキにかえると、とがらせた口から息を
吐はいた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠かくすように口をむすび、すばや
くうなずいた。そして、武藤は握にぎっていたこぶしから人差し指と中指を
伸ばすと、ぼくにむかってその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永
は自分の手のひらを見つめながらパーをチョコキにかえて、輪のなかにさ
しだした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよ
う。時間もなしし、今日はチョコキがブラシをかけるよ」

そう言って、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。
ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは
八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかつた。ぼくの横には久保
がいて、ブラシとブラシが離はなれないように歩幅ほはばをあわせて歩いている
と、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大腿おおももでブラシを
引いていく。コートの端はしまでくると、内側の武藤が歩幅せまを狭くしてきれ
いな弧こを描えがき、直線にもどれば二人ともがまた大股せまになってブラシを引
いていく。

きつと、ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体とし
ても、もつともつと強くなれるはずだ。

(佐川光晴「四本のラケット」より。なお、本文には省略等があります。)

*1 グーパーじゃんけん……グーかパーを出して、二つのチームに分かれる
ために行われるじゃんけん。

*2 武藤……「ぼく」と同じテニス部に所属する中学一年生。練習熱心で、
一年生の中では末永とともに強い選手。

*3 末永……「ぼく」と同じテニス部に所属する中学一年生。武藤とプレー
スタイルは似ているが、練習はすぐに手を抜こうとする。

*4 久保……「ぼく」と同じテニス部に所属する中学一年生。「ぼく」とは
小学一年生からの友達で、まじめな性格。

*5 金星……大きな手からのこと。

*6 ダブルフォールト……テニスでは一回に二本のサーブを打つが、二本と
も失敗すること。

問一 X・Y・Zに体の一部を表す漢字一字をそれぞれ
入れて、慣用表現を完成させなさい。

問二 ①に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ
選び、記号で答えなさい。

- ア イライラ イ モヤモヤ ウ ゾワゾワ エ シクシク

問三 ——線 a 「裏腹に」・ b 「釘を刺して」の意味として適当なもの
を、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- a 「裏腹に」
ア 無関係に イ 比べずに
ウ 反対に エ 気づかずに
b 「釘を刺して」

- ア 念を押して イ 邪魔をして
ウ 指示をして エ 宣言をして

問四 ——線②「ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった」とあり
ますが、それはなぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一
つ選び、記号で答えなさい。

ア もし「ぼく」が武藤を呼び止めていたら、顧問に悪だくみのこと
を相談したいと思っているのを、武藤が察したかもしれないから。

イ もし「ぼく」と武藤が話していたら、ほかの一年生に悪だくみの
中心人物がわかってしまったかもしれないから。

ウ もし「ぼく」が武藤を呼び止めていたら、自分が悪だくみの新た
な標的になったかもしれないから。

エ もし「ぼく」と武藤が話していたら、裏で何か悪だくみしている
のではないかとみんなに疑われたかもしれないから。

問五 ——線③「ぼくはくわかった気がした」とありますが、「ぼく」は「自分のすべきこと」はどのようなことだと考えていますか。本文中の言葉を使って、三十字程度で答えなさい。

問六 ——線④「ぼくは落胆するのと同時に自分の甘さに腹が立った」とありますが、なぜ落胆したのですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 武藤が顧問か中田さんに、自分たちのしたことを打ち明けたかも知れないと期待していたが、そうではなかったから。

イ いつもなら、昼休みにテニスコートに来るはずの顧問も中田さんも、この日に限って来なかったから。

ウ 集まってきた一年生の誰もが後悔しているのに、誰一人として謝罪の言葉を口にしなかったから。

エ 末永は昨日のことなど気にしていないと思っていたのに、非常に気にしている様子だったから。

問七 ——線⑤「どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい」とありますが、そのように考えるのはなぜですか。解答欄らんに合うように、本文中から三十五字以内で探し、はじめと終わりの五字を抜き出しなさい。

【三十五字以内】と考えたから。

問八 ——線⑥「太二、わかったよ。おれもチョコキにするわ」とありますが、久保は「ぼく」の出した「チョコキ」をどのような意味だととらえましたか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひとりだけチョコキを出してしまつて恥ずかしいので、いっしょにチョコキを出してほしいという意味。

イ 武藤に今日はグーパーじゃんけんをやめるように、久保から提案してほしいという意味。

ウ 明日からは一年生全員でコート整備をすることにしようという意味。

エ コート整備する人をグーパーじゃんけんで決めるのをやめようという意味。

問九 次の会話は本文について、二人の中学生が話している場面です。

これを読んで、後の各問いに答えなさい。

A花 一年生の部員たちが末永をだまして、一人でコート整備をするように仕組んだけれど、後悔しているところに少し救いがあるよね。

B美 そうそう。だましてみんな楽しんでむなんていう後味の悪いものではないのがいい。

A花 最初に言い始めた武藤も、結局とても後悔してる。「ぼく」から声をかけられただけで、いつもは見せないような【1 六字】をうかべたというところからわかるよね。

B美 それに、主人公の「ぼく」は、【2 二十一字】と思うけど、それを思いとどまるよね。自分たちの不安は、【3 十一字】のせいだけど、末永は、今日もハメられるかもしれないという【4 二字】をかかえて、【5 八字】をしているんだって気づいて。

A花 最後に、「ぼく」と武藤、久保、末永でVサインを送り合って、ただだまってブラシをかけ続けるところに、この四人のきずなのよなものを感じた。

B美 いろいろあったけど、【6 七字】歩いているうちに、お互いたが口をきいているわけでもないのに、なんとなく【7】し合っ結びつきが強くなっていく感じがするよね。最後の一文にあるように、きっとこのチームは団結して強くなっていくんだろうな。

(1) 【1】～【6】に入る適切な言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

(2) 【7】に入る適切な言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同情 イ 理解 ウ 共鳴 エ 感動

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

幸福とは、どんな状態かと言うと、自分はこれをやるために生まれてきたんだ、と思えることです。もし思えたら、それはとても充実^{じゅうじつ}している状態です。それは、幸福です。それは自分が、持って生まれた、隠^{かく}されていたものを、いまAハッキリしているぞという内側からの感覚と、それを「ああ、すばらしいですね」と評価してくれる、社会の側からの客観的な評価とが、結びついた状態だと思います。別に世界一や日本一になる必要は、全然ありません。充実しているなあと思えることが、いちばんです。

①昔、日本にはこういう、職人さんみたいなタイプの人がよくいました。うどんをつくる。手を抜^ぬかないで、ちゃんとしたうどんをつくる。小さなお店かもしれないが、うどんを出して、お客さんがおいしいと食べる。で、うどん屋としてやっていける。これがすべてで、そこに、妥協^{たせうぎょう}の余地のない自分の世界がある。なんていうひとが、たくさんいたので。

いまはこういう仕事を見つけにくい時代なんだけど、でも見つかるはずです。それには工夫と努力が必要です。努力とは、コストを払^{はら}うことです。努力してもa空^{くう}ぶりになるかもしれないですね。空^{くう}ぶりになるって、リスク^{リスク}ですね。

リスクを取らないと、努力はできないんです。②努力は報^{むづ}われると決

まっていけない。で、そのリスクは、社会の側で埋^うめ合わせてくれないから、自分でBオ^おわなければいけない。ダメだったらめげますけれど。ダメだった理由があるわけで、それをしっかり踏^ふまえるなら、また次のチャレンジがあると思います。

若いひとの場合は、二回や三回、挫折^{させつ}しても大丈夫^{だいじょうぶ}ですから、そういうチャレンジを引き受けるほうがいい。チャレンジするなら、全力を出さないで、チャレンジにならないです。本気でやってはじめて、ダメなときに挫折^{させつ}ができます。

挫折も大事です。自分の適性や、社会の現実を思い知ることができるから。そうやって、行けるところまで行かないと、自分の隠された力を出てこないと思います。

(中略)

さて、幸福の反対が不幸だと言いましたけれど、幸福だけしか起こらない、なんてことは人生にはありません。

いちばん大事なひとを失ってしまふ。これこそはと思っていた大事なことで何か失敗する。自信があつて、やっていたことなのに、自分よりもっとうまくできるひとを見つけてしまった。信頼^{しんらい}していた友人に裏切られた。など、とにかくさまざまなマイナスが、間隔^{かんかく}を置いて、ときにはまともなやつてくることもあるでしょう。

読者のあなたには、幸せになつてもらいたいですが、

A

ちよつとしたことであきらめるのなら、それは、あなたが本当にやり

たかったことではありません。③本^{ほん}当^{とう}にやりたいことだと覚^{かく}悟^ごを決めるためには、それ以外のことをあきらめなければならぬかもしれないかもしれません。何かを手に入れるということは、何かをあきらめるといふことなのです。

自分のことをよくわからないひとは、あきらめる勇気がないために、あれもこれもと欲張^{よく}って、けつきよく大切なものを手に入れられない可能性が多い。たとえば年に何回かはドイツ・ニールランドに行きたいし、三十代でCシンチクマンションも買いたいし、(中略)親の面倒^{めんどう}は見たいし、などあれもこれもと考えていたら、エネルギーが分散してしまいません。

ほかのひとがわけなく手に入れているように見えるものでも、自分手に入らないかもしれない。そんなことは、気にしないことです。ほかのひとと自分を比べてはいけません。これは、幸福になる秘訣^{ひけつ}のひとつです。ほかの人びとなんかどうでもいいと思うことです。それは、自分を大事にすることに通じます。

ほかのひとと比べるんなら、みんなのためにがんばって、自分の苦勞をいとわないひとと比べなさい。そのひとがどれぐらい大変で、どれぐらいのコストを払い、どれぐらいのことをしているのかを、具体的に知ることです。そして自分なんか、まだまだだ。まだ楽をしている。まだ恵^{めぐ}まれていて、というふうに見えるはずですよ。そうしたら、がんばれます。

(中略)

なんやかんや言っても、たいていのひとは、そのひとの人生の条件を、ほかの誰^{だれ}かに整えてもらっています。親が整えてくれたり、友人や知り合いが整えてくれたり、社会が整えてくれたり、学校や、会社が整えてくれたり。本当に自分ひとりでがんばりました、なんていうひとはいないのです。

どのようにそれが整ったかというところ、ほかのひとが見返りなしに、あなたのために活動してくれたからです。それを考えたら、ではお返しに自分は何をすればいいか、というところに頭が回るはずですよ。

もうひとつ、ほかのひとの役に立ち、ほかのひとに喜んでもらうことと、自分の喜び^{きこみ}とが、シンクロ^{しんくろ}してくるといふのがとても大事です。見栄^{みえ}を張つても無駄^{むだ}だし、嘘^{うそ}をついてもしょうがないし、素直に社会の法則を理解して、社会の中で生きていくのがよさしい。

④社会学は、どういうものか。社会には、法則性があるんですよ。おおぜいの人びとがてんでんばらばら、勝手に生きていますけど、その結果、社会にはルールや決まりができあがっています。それは、法則^{そと}によって動いていて、それを科学的・客観的に研究できます。これに背^{そむ}くようなことを考えても、Dクウンウ^{どくうんう}的な議論^{ぎろん}になってしまいます。社会の法則に合致^{がっち}しないんですから。

社会学を学ぶということは、社会がこのように、人びとの勝手な希望や意思から、独立に動いているんだということを知ることです。それを踏^ふまえて、自分が行動するには、じゃあ、どうしたらいいかっていうふ

うに作戦を立てます。そうすると、少ないコストで、無駄なコストを払わないで、必要なところにエネルギーを集中できるので、あなたが幸せになる可能性がぐんと高まります。

社会学を学ばないで、友だちの噂うわさばなし話なんかには左右されたり、マスメディアやEザツシエザツシの情報をbbうのみにして行動しても、ろくな結果になりません。マスメディアやザツシは、あなたのことなんか全然考えなくて、おおぜいのひとに売ればいいということだけ考えています。平均的な人びとに向けて、彼らの喜びそうなことを言っているにすぎないんです。

あなたは世界でたった一人の、ユニークな存在です。*4あなたにピッタリ合う生き方の処方箋*5は、あなた自身が見つけるしかありません。そうやって自分の人生に責任を持つというのが、⑤幸福を手に入れる、いちばんよい方法だと思います。

(橋爪大三郎『ふしぎな社会』より。なお、本文には省略等があります。)

- *1 コスト……何かをするために、時間や労力を使うこと。
- *2 リスク……将来起こるかもしれない危険や危機のこと。
- *3 シンクロしてくる……タイミングを合わせてくる。同時に起きてくる。
- *4 ユニーク……他に類を見ないさま。独特なさま。
- *5 処方箋……ある問題を解決するのに効果的な方法のこと。

問一——線①「昔、日本にはよくいました」とありますが、筆者

は「職人さんみたいなタイプの人」を、どのような人だと考えていますか。解答欄らんに合うように、本文中から十五字程度で抜き出さない。

【十五字程度】人。

問二——線a「空ぶりになる」・b「うのみにして」の意味として適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「空ぶりになる」

ア あてがはずれて失敗する イ つまらないものをつかむ

ウ 気持ちがきれてしまう エ あちこちと気が散る

b 「うのみにして」

ア 理解したらすぐに実行して イ 理解も努力もしないで

ウ 理解しながらも疑って エ よく理解せずに受け入れて

問三——線②「努力は報われると決まっていけない」とありますが、それでも筆者は「努力」することが大切だと考えています。その理由を述べた次の文章の空欄に合うように、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出さない。

努力をする時には、「ア 二字」を出してやってみて、ダメならば挫折する。しかし、この挫折こそ大事なもので、挫折することで初めて「イ 八字」を発見することができるからだ。

問四 Aには、次の1～4の文を並びかえたものが入ります。その正しい順番として適当なものを、後のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 必ず不本意な出来事は起こるのです。
- 2 あなたが幸せになるように、みんなが調整してくれているわけでもありません。
- 3 世界はあなたを中心に回っているわけではありません。
- 4 そういうときに、あきらめてしまうかどうかです。

ア 3↓2↓1↓4 イ 2↓4↓1↓3
ウ 2↓3↓4↓1 エ 3↓4↓1↓2

問五 ——線③「本当にやりたいことだとくならないかもしれません」とありますが、「あきらめなければならぬ」のはなぜですか。解答欄に合うように、本文中の言葉を使って、四十字以内でまとめなさい。

【 四十字以内 】から。

問六 ——線④「社会学は、どういうものか」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 筆者は、「社会学」とはどのような学問だと考えていますか。次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って、五十字以内でまとめなさい。

社会学とは、【 五十字以内 】学問。

(2) 「社会学」を通して社会の仕組みを学ぶことで、どのような可能性が生まれると筆者は考えていますか。次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って、それぞれ指定の字数でまとめなさい。

社会の仕組みがわかれば、【 ア 二十字程度 】ので、本当にやりたいことを達成でき、【 イ 五字以内 】可能性が高くなるということ。

問七 ——線⑤「幸福を手に入れる」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 筆者は、人々が「幸福」になるためには、二つの条件があると考えています。本文中の言葉を使って、それぞれ二十五字程度でまとめなさい。

(2) これらの条件を踏まえて、筆者は「幸福」とはどのような状態のことだと考えていますか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世界一になる必要などは全くないが、自分の工夫と努力を結びつけて充実した人生を送っていると自己評価している状態。

イ 社会からの客観的な評価を得て、今まであいまいにしか評価できなかった自分の力を実感して、うれしく感じている状態。

ウ 今何をすべきかを考えて、人がしてこなかった事柄ことごとに取り組み、時代からの要望と自己の充実感との両方を感じている状態。

エ 自分がすべきことをして充実している心の状態と、その成果をすばらしいとする社会からの評価とが結びついている状態。

問八 〰〰〰線 A 「ハッキ」・ B 「オ（わ）」・ C 「シンチク」・ D 「クウン

ウ」・ E 「ザッシ」のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

